第３回家庭教育学級を振り返って

家庭教育学級長市瀬/副家庭教育学級荒木

1月31日（火）、第３回家庭教育学級が開催されました。今回は『子供の発達について』というテーマで、本校カウンセラーの　　先生にご講演頂き、また、来賓として世田谷区教育委員会社会教育指導員の杉本様をお招き致しました。当日は、校内から総勢34名の皆様にご出席頂きました。ご参加の方、ありがとうございました！大変貴重なお話を聞くことができましたので、ご講演頂いた内容を一部ですがご紹介します。

子供の発達段階と身につける課題について

アメリカの心理学者エリクソンが提唱している心理社会的発達理論では、発達段階が６段階（乳児期～幼児期～児童期～青年期～成人期～老年期）に分けられており、各発達段階には身につけるべき課題（発達課題）と危機（それにともなって訪れるであろう葛藤）が設定されている。小学校6年間は児童期と重なり、この児童期における身につけるべき課題は「勤勉性（いろいろなことを自発的にやってみようと思う気持ち）」であり、それに伴って訪れるであろう危機・葛藤は「劣等感（やってもだめだという気持ち）」である。そして、この危機（劣等感）を乗り越えること（できないかもしれないけど大丈夫、やってみよう！と自分で思えること）により、次の発達段階の課題にいける。

身近なアニメに例えると、ドラえもんに出てくるのび太くんは、ドラえもんの励まし・認める行為（のび太くんの駄目な行為を注意するが、のび太くん自身を否定せず、「大丈夫だよ！君ならできるよ！」と声をかけていく行為）により次々といろいろなことにチャレンジをしていけている。児童期の子供たちには、のび太くんに対するドラえもんの様なサポートが理想的であり、「褒める」ことより「認める」ことが一番大事なのである。

仲間関係の変化

ギャングエイジとは、小学校中学年くらいに特定のグループ（仲良しグループ10人程度）で遊びはじめる時期のことであり、反抗期という意味ではない。仲間関係は、ギャングエイジ（特定の仲間と徒党を組み、共通の体験をすることを好む時期・小学校中学年）→チャムシップ（3～4人程度のグループでより親密度が高くなる時期・中学生）→ピア（親友など信頼できる他者との関係・高校～大学）というかたちで質が変化していく。

「苦手」について

（少し苦手）　　（すごく苦手）

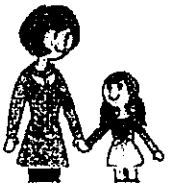
「時間に遅れる」「忘れ物が多い」「落ち着きがない」「方向音痴である」など、「苦手」にもいろいろな種類があり、同じ「苦手」といってもグラデーション（スペクトラム）で考えることができる。「忘れ物が多い」人でも、メモすることで解決することができる人は薄い方、メモしてもそれを忘れるので声かけなどが必要な場合は濃い方に入る。それぞれに必要なサポートもグラデーションで考えることができる。「苦手」さが濃い方に入る場合には、「発達にアンバランスがある」場合があり、本人の努力だけではどうにもならない場合がある。その「苦手」さの濃さに応じたサポートが必要である。

講演を聞いての感想（アンケートの回答より一部抜粋）

○児童期の発達について学問的な話を、ドラえもんなど身近な話題を交えながら分かりやすく教えていただきました。

○褒めるというより、認める大切さがよくわかった。

○大人が「認める」ということをしてあげることで、子供が自分自身を認められるようになるということがよくわかりました。

○人間だれでも苦手なことがあるんだと改めて気づかされました。

ご参加して頂きました皆さま、有難うございました。